

非活動的な身体と音楽的テーマ

—— アルバート・ムーア《音楽家》と《カルテット》

筑波大学 梶間 里奈

1860年代のイギリス画壇では、絵画を社会的目的から解放し「美」を表現することを芸術の唯一の目的とする唯美主義芸術が台頭した。その芸術では読解可能な主題をもたない「芸術のための芸術」が目指され、さらにウォルター・ペイターの「全ての芸術は音楽の状態に憧れる」という言葉をモットーに絵画を音楽に近づける試みが行われた。そのような試みの中でアルバート・ムーア(1841-1893)は、《音楽家》(1867)と《カルテット—1868年の音楽芸術へのある画家からの贈物》(1868)を制作し、古代ギリシアの衣装を着て楽器を演奏する男性とその音楽を聴く女性を描いた。彼女たちは音楽を聴くだけで際立った活動をしていない。ムーアはこれらの作品以後、意味のある活動をしない「非活動的な女性」を描き続け、イギリス美術に独自の女性イメージを出現させた。ムーアの《音楽家》と《カルテット》はこれまで唯美主義の音楽的絵画としては論じられてきたが、本発表では音楽がいかに関与したのか、そしてその女性像が19世紀後半のイギリス美術にどのような新しい美学をもたらしたのかについて考察する。

《音楽家》では、竖琴を演奏する男性と演奏を聴く女性2人に加え、楽譜を想起させるグリッド状の構図や色彩のハーモニー、画面にリズムを与える日本のうちわが見て取れる。《カルテット》では、座って弦楽器を演奏する男性4人と立って演奏を聴く女性3人が描かれており、人物たちの顔や色彩が反復される一方、髪の色や画面上部の陶器の形において差異が見られ、画面にリズムが生まれている。これら2作品は「見る」というよりも「聴く」絵画といえる。

2作品が画面全体で奏でる音楽は、演奏を聴く女性たちの姿勢や態度に影響を与えている。《音楽家》で恍惚の表情を浮かべる2人の女性は、聴覚だけでなく視覚や触覚といった他の感覚器官にも訴えかける音楽の特性により内なる官能性を引き出され、それゆえ姿勢が弛緩している。《カルテット》で立っている3人の女性たちは音楽の甘美さに没入しており、音楽を聴くこと以外は何もしていない。彼女たちの姿勢はある意味で「非活動的」である。ムーアはこのような非活動的な身体と音楽との関連性を意識し、非活動的な女性像を発展させる中で意図的に音楽的テーマを採用し《音楽家》と《カルテット》を制作したと考えられる。

1870年代以降ムーアは音楽的テーマを描かなくなるが、《音楽家》の女性たちの姿勢や《カルテット》の女性たちの没入する態度は引き継がれ、ソファ上で身体を弛緩させたり読書に没頭したりする女性を描くようになる。このような非活動的な女性像は、19世紀後半から20世紀初頭において *dolce far niente* と題された絵画の中で複数の画家により描かれ、非活動的な女性像はイギリス美術に「何もしないこと」の美学をもたらした。